

保育者養成校における音楽理論指導について

～実技と知識との関連付け～

About Guidance of Music Theory at Training School for Childcare Workers
the Link between Piano Practice and Knowledge of Theory

鎌田千佳（千葉敬愛短期大）

Chika KAMADA (Chiba Keiai Junior College)

（要旨）

現代の保育・幼児教育現場で役に立つ音楽表現とは何か、そのために習得すべきピアノ、及び弾き歌いの技術習得のための成果を伴う練習法の一提案として、ピアノ実技と音楽理論の関連付けに注目し、その有効性を探るためにグループ講義として行った初期段階からの音楽理論講義についての実践報告と今後の指導について考察する。

（キーワード）

ピアノ、音楽理論、保育者養成校、成果を伴う練習法、関連付け

1. はじめに

多くの保育者養成校において学生達のピアノ経験年数は様々である。幼少期よりピアノを習い事として経験してきた学生もいれば、入学が決まりピアノ教室に自ら通い始めた学生、そして入学して初めてピアノに触れる学生もいる。

筆者は卒業後に保育・幼児教育現場で、豊かな表現を伴う応用の利くピアノ演奏及び弾き歌いができるようになって欲しいと常に考えているが、豊かさや応用のための技術を身につけるためには、まず基礎となる土台作りが最も大切であり、それは「正しい読譜力」であると考えている。

ピアノの経験の有無にかかわらず、大変前向きな学習意欲を持ちピアノの授業に取り組もうとする学生の姿勢には喜びと期待を感じる。しかし、課題が進んでいくうちに、「正しく弾けない」というつまづきを感じ、せっかくの学習意欲が薄れていく状態に陥る学生を何度もみてきた。

正しい知識を持ち、自らの演奏の正誤の判断がで

きるようになれば、学習者の意欲と共に成果もあがると確信する。意欲はあるが、自ら正誤の判断ができない状態でピアノの前に座り指を動かさず練習をしていても、間違いに気づかないまま進んでいけば成果につながらず、「たくさん練習したのに」とか、「どれだけ練習してもピアノがうまく弾けない」と、モチベーションは下がり、練習することに嫌気がさし結局練習しなくなる。するともちろん「正しい演奏」ができず益々嫌になるという悪循環が生まれる。練習したなりの成果を自らが確信できれば、「もっと上手になりたい」「このように弾きたい」と、更に具体的な欲や目標もでき、このことが後の豊かな表現や、応用の利く演奏技術習得へつながると考える。

つまり成果の伴う技能習得法と学習意欲の向上とは当然関係があると考えている。

本論文では、成果を伴う技能習得法の一提案として、ピアノ実技の初期学習時に正しい読譜力を獲得するために必要な音楽理論と、その知識が演奏の正

誤を判断する力と結びつくために実践した音楽理論講義について論述する。

2. 音楽理論の必要性を探る

(1) 保育者養成校の現状と課題

保育者養成校においては、授業時間に限りがあり、ピアノに対して経験の浅い学生も多く、どうしても演奏技術中心の指導になりがちである。当然、課題曲や学生に合わせ必要に応じた簡単な音楽理論の指導は行われている。しかし、1対1の実技指導で、これまでの経験ではその時の課題曲で指導した理論の知識は、その場限りでの学習として終わってしまい、その後の課題の準備や演奏、そして学生自身が工夫できるようになって欲しい演奏表現（＝例えばコードネームを見て伴奏付けする弾き歌い）につなげられていないと感じられる。拍子やテンポの不安定な自らの演奏に何も違和感や不快感を感じないままでは、その先にどれだけ数多くの課題に取り組んだとしても、正しい技術習得はできないであろう。そして、季節感や情景が全く感じられない表現の乏しい歌と伴奏では、残念ながら保育・幼児教育現場での表現活動の本質的な役割は果たせないといいたい。

このような残念なことにならないためにも、学生自らが普段の練習時に演奏の正誤の判断ができれば、演奏技術習得への時間の短縮となり、また、達成感を得られることで自信が持て、更なる学習意欲につながる好循環が生まれると確信する。

本論では、その正誤の判断に音楽理論の知識は有効的で重宝されるものとする。

(2) 音楽理論と技術習得との関連性

保育・幼児教育現場で環境・状況に合わせて応用の利く演奏表現のための土台作りとして、まずは安定した演奏につながる読譜力が必要と考える。

この土台となる読譜力を身につけるためにも、音楽理論は必要な知識であり、保育者養成校での到達目標でもある伴奏技能習得の過程や成果においても、理論の知識の有無はその表現力に大きく影響すると

推測する。

では、保育者養成校で、理論の知識を伴奏技能習得に関連付けられるためには、最低限どこまでの音楽理論指導が必要なのであろうか。

河原田(2015)は、保育士・幼稚園教諭養成系で行う一斉授業としての音楽理論の最低限の基本的内容を、弾き歌い教材の分析から①調号の数・調性②長調・短調③拍子④コード奏法の4項目に焦点を当て音楽理論の必要性と指導法を検討している。平松と井上(2015)は、①音程②調③拍④和音⑤記号の5項目に分けた基礎的音楽理論テストの結果の分析から、これらの理解度と音楽経験との間に強い関連性があることを報告し、更に、音楽経験と伴奏技能（＝コードネームを見て伴奏ができるか）とのアンケート調査結果により、「伴奏技能を含む音楽技能及び表現能力が基礎的音楽理論の理解と関連すると考える場合には、基礎的音楽理論を学習させる課題も重要であるといえる」と主張し、理論と技術の統合化を提案している。

又、兎束(2012)は音楽理論の授業後の学生アンケート調査結果から、普段の学生の態度・理解度だけではなく意識的な成長を感じた報告をしている。

このように、保育者養成校での音楽理論の指導の必要性と有効性は広く認められているが、前述の河原田(2015)も提言しているように、すべての学生が音楽理論を理解し習得することは容易ではなく、授業形式や授業展開において工夫が必要とされている。

又、松川(2017)の、「読譜力の獲得は音楽学習の初期の段階で行うべきものと考えられる」との主張は同意できるものであり、初期段階での音楽理論の理解・習得は、学生の読譜に効果的な補助力を発揮し、特に初歩的段階の学生にとっては効率のよい成果、要するに正しく演奏できるまでに必要な練習時間が短くなるという効果が得られると考える。

そこで、成果が出れば自信につながり、更なる技術習得への意識向上につながるというプロセスを想定した音楽理論の授業展開を、今年度担当した学生の1年生を対象に実施した。

3. 講義内容と方法

(1) 講義の目的

①正確な読譜力の習得
 ②コード伴奏課題のための知識と意識付け
 2年次のコード伴奏付け課題に取り組む時に初めてコードについて学ぶ学生の戸惑いと理解習得度の低さ、そして2年次の5月～6月に行う幼稚園実習についての過去の学生の意見調査から、あえてコード伴奏法の基礎まで触れてみた。

(2) 対象

2017年度入学の1年生 24名
 (5名1クラス×4、4名1クラス×1)
 内訳：ピアノ(音楽)経験者 15名
 ピアノ(音楽)未経験者¹ 9名

(3) 講義項目と講義方法

上に述べた目的②のコードネームの講義をゴールと見立て、必要だと思われる項目で展開した。

- ①音符・休符の名前と長さ
- ②記号と楽譜の書き方
- ③音名(日本語・英語)
- ④音階
- ⑤全音・半音
- ⑥音程
- ⑦調号
- ⑧調名
- ⑨和音
- ⑩コードネーム

今年度は90分授業で担当する学生が例年より少なく、そのためこれまでより余裕のある時間配分が可能であったことは、時間を気にしながらの悪い意味でのスピード感を持つ講義とはならず、学生とお互いに気持ち的な余裕も持てた感触があった。

毎授業のはじめの15分を目途にして項目ごとに講

義し、学生達には五線紙を提供して実際に記譜、板書をしてもらい、その様子を観察しながら理解度を判断していった。上記の10項目については、かならずしも1回に1項目ではなく、④音階と⑤全音・半音を組み合わせ、又、⑦調号と⑧調名の並行講義により調性への意識も試みた。

(4) 講義展開とその過程

前期はバイエルやブルグミュラーなどのピアノ教本からの課題と共に⑦調号⑧調名まで、後期は弾き歌い課題も並行して取り組みながら前期の復習と特に③音名の確認に重点をおき、⑨和音からの講義とした。

当初、前期で一通りコードネームまで、後期に学生の理解・習得度を判断し、特にコード伴奏につながる重点項目を中心に復習講義を計画したが、早々に無理と判断し、前述のように変更した。ピアノ実技＝ピアノを弾くことへの意欲を失わせない事への配慮をしながら、ピアノ課題達成の進行具合とバランスをとりながらの講義では、⑦調号⑧調名まで、いわゆる「調性」への理解までが適当であるとの判断に至ったからである。

この⑦調号と⑧調名の講義では、ほとんどの学生にとって初めての知識であったこともあり、学生の戸惑いが見られ、2回にわたり講義したクラスもあった。

このような講義進度については、出席状況やその時点でのピアノの課題達成度との関係でグループ講義が成り立たない日や、クラスごとに理解度が違う項目がみられた事などにより、クラスごとに調整しながらの講義展開が必要であった。

また、学生が少しでも理解度を高めるために、学生の「習得意識」にわざと触れるような説明も時に添えてみた。例えば、「子どもの弾き歌いの曲には♭1つ、♯は2つまでが多いから」、「保育士の国家試験ではコードネームから和音を当てなくてはならない問が出題されている」などである。その瞬間には学生はハッとしたような表情を見せ意欲的な姿勢

¹ 入学前のピアノ経験1年未満の学生を含む。

がみられたものの、その後の演奏との関連付けができる確実な理解と応用までの成果は残念ながらまだ低く、知識の理解度を高めると共に、それを演奏にいかに関連付けさせるかは更に工夫が必要であるといえる。

この理論講義は単位のための必須項目ではないため、又、時間制限のある中での講義であるため、すべての理論項目において学生の理解度を小テストなどの方法で徹底して確認できたわけではなかった。

講義はしたものの理解の確認ができず、さらっと通り過ぎただけというような項目があったことは確かである。常に時間制限のある保育者養成校での指導の困難さを痛感しながらも、その中で行う音楽理論講義項目の再検討が必要であると感じた。

ただし、次年度の伴奏技能習得のためのコード伴奏課題に強く関連づけるための③音名と⑨和音⑩コードネームについては、できる限りの反復確認を試みた。五線紙を用いての紙上での反復学習だけでなく、その時に取り組んでいるピアノ課題や特に後期では弾き歌い課題を用いて、ピアノを弾きながら和音の響きを確認、伴奏形をアレンジ、余裕があれば移調奏に挑戦など、多方面からのアプローチによる方法を提案し実践した。これらの方法は、弾き歌い課題、及び2年次の実習での演奏、そしてその先の表現への意識付けをねらった指導である。演奏法のバリエーションの提案は、それらの違う演奏法から何か感じとることにより「表現」に興味を持ち、将来の子ども達との表現活動に役立つ演奏技術習得を意識してほしいという希望と期待をこめての実践である。よって、現段階でこの項目の理論理解度がまだ低くあっても、2年次に再度学習・習得することにより、読譜力から表現力習得へ展開の期待は大きく、初期段階での理論講義のねらい②によるコード伴奏付けの成果に関しては結論付けを急がず、引き続き興味深く観察していきたい。

(5) 授業を終えて

音価や記号などに関しては、ほとんどの学生が理

解し、ピアノ演奏課題の成果からみる課題達成までの練習時間と練習内容から判断すると、譜読みの際に理論との関連付けがあったと考えられ、今回の音楽理論講義による読譜力向上の成果がみられた。

一方、後期から始まった弾き歌い課題の演奏については、歌なしでのピアノだけの読譜力の安定と効率の良さには同じく成果がみられたが、歌を歌いながらの表現力につながる音程、調性、和音などの理論との関連付けが乏しく感じられた。これらは各項目の理解が未熟なだけなのか、あるいは理論そのものは理解できているが自らの演奏に関連づけられていないのか、明確な判断に至るにはもう少し時間が必要だと判断する。1年次後期に触れる弾き歌い課題曲に関しては、2年次に本格的に弾き歌い課題に取り組むための導入としての目的もあり、特に入学時ピアノ初心者段階の学生にとっては、土台作り＝読譜力獲得で精一杯であることが大きいからである。ただし、引き続き表現力と理論の関連付けに関しては細かく観察し判断していくことが指導者として必要かつ重要であると考えられ、理論と演奏表現との関連づけをいかにさせるか、その効果的な方法を探っていくことはこれからの課題でもある。

講義展開に関しては、クラス単位規模の一斉講義であれば、計画どおりのスムーズな講義進行は可能であったと推測する。だが、前述したように進行や展開を調整しながらの今回のグループ講義では、逆に一斉講義ではない故の難点を利点とするべく学生一人一人の理解・習得力の判断が早期にでき、時間が許される限りその補助指導が可能であったことで、学生の理解度向上だけではなく、学生との信頼関係確立に副産物的効果があった。

また、個人的指導ではなくグループ講義にした効果として、同じ内容の講義を聞く一体感と、「少しの競争力」がより理解度の向上につながったのではないかと考察する。

この「少しの競争力」とは、講義中に一人一人に答えを求める簡単な確認作業としての問いかけや、復習の小テストの解答を順に発表していく際、他人

を意識しながら自らの理解度の確認することで意識付けされる効果的な学習意欲と言い換えられるのではないだろうか。グループ内の学生同士で、確認し合ったり、教え合ったりする姿もみられ、これもお互いに刺激のある「成果を伴う学習法」のひとつであったと考えられる。

4. 学生のアンケート調査より

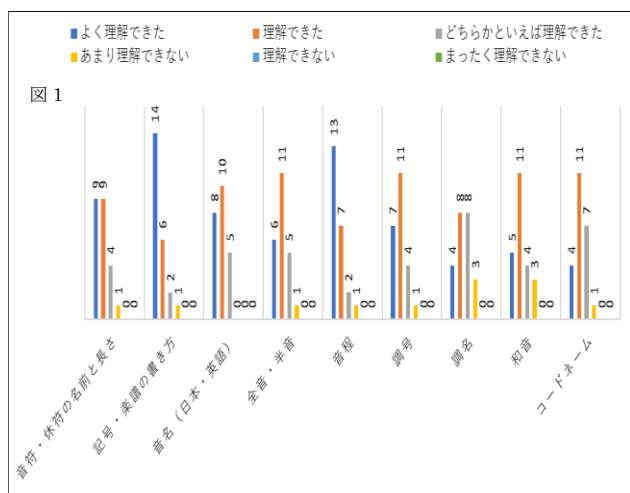
最後の授業で、受講学生に講義の項目別理解度と、音楽理論に対する意識に関するアンケートを実施した。(受講学生24名、アンケート回答23名)

素直な自己分析の回答と感じる興味深い結果を報告し一部考察する。

(1) 講義を受けた理論の各項目²の理解度(図1)

それぞれの講義項目ごとに次の6段階の理解度で回答を得た。

- ①よく理解できた
- ②理解できた
- ③どちらかといえば理解できた
- ④あまり理解できない
- ⑤理解できない
- ⑥まったく理解できない



「理解できない」「まったく理解できない」の回答は全ての項目において無かった。

「あまり理解できない」と回答した学生は、どの

項目でも同じ学生という結果ではないが、ピアノ初心者の学生がほとんどであった。調号と調名の関連付けを苦手とする回答の多く、それが和音の理解度に影響している。

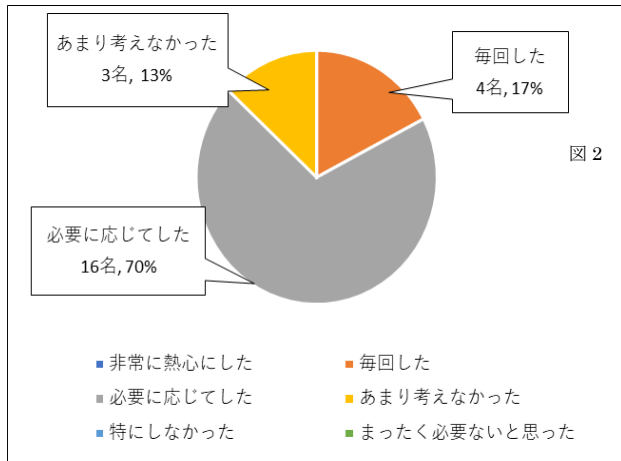
興味深い回答結果として、①音符・休符の名前と長さについて「あまり理解できない」と回答した1人の学生について考えてみたい。

この学生は幼少期からの6年間のピアノの経験があったが、当初から不安定な拍感とテンポでの演奏をしており、拍子に関する意識が欠けていた。今回の理論講義の第1講のテーマが「音価」についてであったが、講義中の反応は薄かったことを記憶している。実技指導の際には拍の間違ひに関してその都度指摘し正してきたが、1年生最後の課題曲のブルグミュラー中盤曲の演奏に際しても、最後の最後まで拍の不正確さの指導が必要であった。この時、この音は1拍、この休符は半拍、などという理論上の回答はいつも正しかったにもかかわらず、演奏が正しくできない。ということから、「知識として理論を理解する＝正しく実技表現できる」ということではない一実例であり、「理論・知識習得」と「感覚」との関連付けの必要性を強く感じたのである。ただ、この学生自身が音価の理解ができていないと自己分析していることは救いであり希望がもてる。

(2) 音楽理論を理解するために復習をしましたか。(図2)

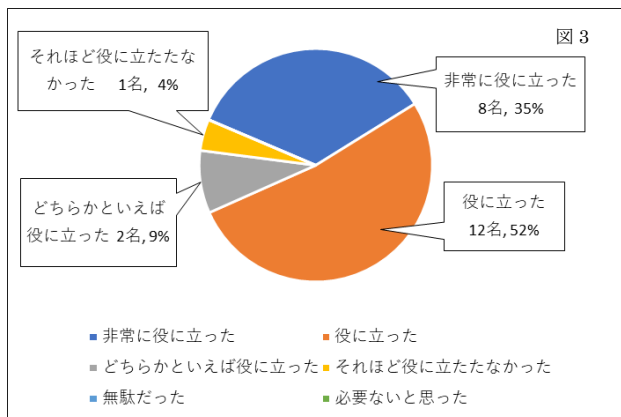
- ①非常に熱心にした 0名
- ②毎回した 4名
- ③必要に応じてした 16名
- ④あまり考えなかった 3名
- ⑤特にしなかった 0名
- ⑥まったく必要ないと思った 0名

² 本稿3-(3)の10項目中④音階の項目は欠けている調査。



(3) ピアノを弾くときに理解した音楽理論が役に立ったと思いますか。(図3)

- ①非常に役に立った 8名
- ②役に立った 12名
- ③どちらかといえば役に立った 2名
- ④それほど役に立たなかった 1名
- ⑤無駄だった 0名
- ⑥必要ないと思った 0名

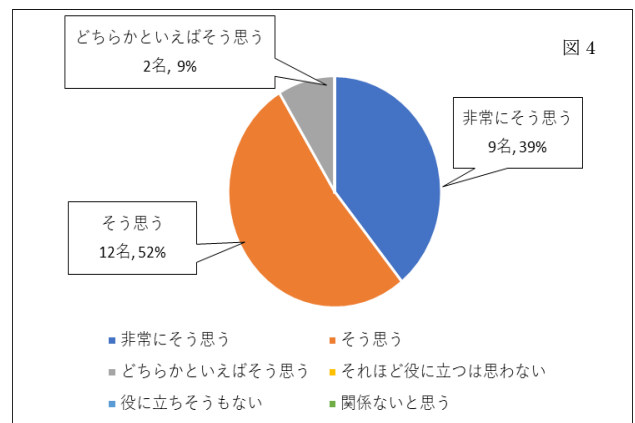


「それほど役に立たなかった」と回答した学生はピアノ経験者で現在も外部でのピアノレッスンを受けている。よって、今回の講義内容がすでに知っている内容であり、新たな知識の習得に当たらなかったあつたための回答であることも推測できる。だが、最後のピアノ課題曲としてソナチネを演奏したが、読譜に関する間違いはないものの、表現に乏しく、表現力への意識も薄い。この例からも、理論が表現力へつながるためには理論の「感覚」へのアプローチを探る興味につながった。

(4) 来年度の弾き歌いや伴奏付けの課題に音楽理論は役に立つ、又は、役立てたいと思いますか。

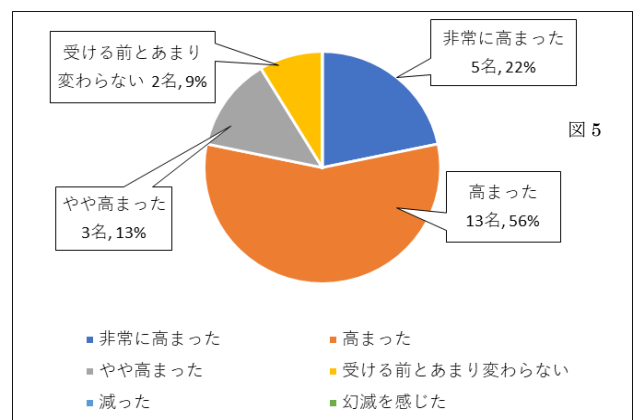
(図4)

- ①非常にそう思う 9名
- ②そう思う 12名
- ③どちらかといえばそう思う 2名
- ④それほど役に立つとは思わない 0名
- ⑤役に立ちそうもない 0名
- ⑥関係ないと思う 0名



(5) 音楽理論の講義を受けることによってピアノや音楽に対する関心が高まりましたか。(図5)

- ①非常に高まった 5名
- ②高まった 13名
- ③やや高まった 3名
- ④受ける前とあまり変わらない 2名
- ⑤減った 0名
- ⑥幻滅を感じた 0名



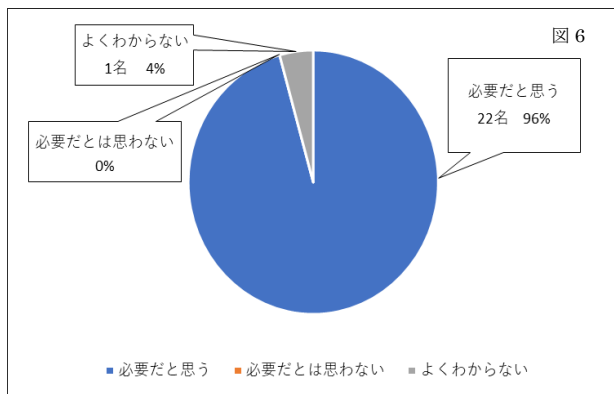
「受ける前とあまり変わらない」の回答者2名は前述の(3)で「それほど役に立たなかった」と回答し

た学生と、ピアノ未経験者であり音楽そのものに興味がないとみられた学生だった。1年間課題達成も容易ではなかったのだが、最後の⑩コードネームについての講義以外は理論の理解はできた。と回答している。この学生の弾き歌い課題の取り組みと成果を観察してみたい。

(6) 器楽の授業内での音楽理論の講義は必要だと思いますか。またその理由を記述してください。

(図6)

①必要だと思う	22名
②必要だとは思わない	0名
③よくわからない	1名



「よくわからない」と回答した学生の、
・あると便利、なくても授業は成り立つ
というユニークな理由は好感を持って受け止めた。

「理論講義は必要だと思う」と回答した22名のその理由を、4つに分類してみた。³⁴⁵

1. 楽譜に関する理由 (9件)

・譜読みに役に立ったから・正しく楽譜を理解できるから・知らないと楽譜どおりに弾けない など

2. 演奏法や表現に関する理由 (6件)

・知っているると弾きかたも変わってくる・メロディーしかわからない譜面があった場合自分で伴奏がつけられたら子ども達も歌えるから・雰囲気や子ども達に合わせた曲調で弾きたいから・転調できれば歌の幅も広がる など

3. 知識習得に関する理由 (12件)

・曖昧だった知識が確認できた・知識として必要だと感じた・独学で勉強するのは厳しいから・ピアノに対する知識が深まる・音楽の知識を身につけることは大切だと思うから・将来児童に教えることができる⁶ など

4. その他 (3件)

・保育実習の時に役立つ・今後の課題のために少しでも理解しておくと思い思ったから・体だけで覚えるより理論を理解した上でピアノを練習したほうが応用が利くようになると思うから など

「2. 演奏法や表現に関する理由」に分類される記述で、今現在の授業内の課題達成についてだけではなく、将来現場で自分がどのようにピアノを弾きたいか、どのようにピアノを役立てたいか、子ども達とどうピアノを通して関わっていききたいか、という視点からの記述があったことに特に注目したい。これらは今回の理論講義の2つのねらい、①正確な読譜力の習得、②コード伴奏課題のための知識と意識付け、を飛び越え、保育者養成校でのピアノ習得の理想である「保育・幼児現場で役に立つピアノ」への意識づけが芽生えた現れであるといってもよいのではないかと考える。この意識を持ち続け、次年度の弾き歌い課題やコード伴奏課題に取り組むことは、より豊かな表現や伴奏技術習得の成果と大きな関係があると信じる。

今後、単に課題曲を弾くだけでなく、そこに自らの「こんなことがやれるようになりたい」という目的をもった取り組みが継続されることを期待し、その経過と、後に現れる成果を引き続き観察していきたい。

今回の講義が、理由は様々であるが、学生達に必要だと思われたことは、ピアノや音楽に触れる際の音楽理論の必要性が少なからずも証明されたといえよう。

³ 複数記述あり。

⁴ 複数の分類グループに関連する記述あり。

⁵ 学生の記述原文のまま引用。

⁶ 初等教育科の学生の記述。

5. おわりに

保育・幼児・初等教育現場での表現活動に役立つピアノの技能習得のために、音楽理論との関連付けを検討した今年度の講義は、時間制限と学生の学習意欲、そしてピアノ実技課題とのバランスが必要な講義展開であった。

結果として、講義したすべての項目の徹底した理解確認はできなかったが、実技担当者である筆者が理論講義をし、理論と演奏との関連付けの観察が的確だったことが最大の成果である。

初期段階での読譜力の獲得を目指し、1年生を対象に取り組んだ今回の音楽理論講義の成果は、本論3- (3)で述べたように授業時間にやや余裕があった環境と、担当学生の素直で意欲的な学習姿勢によることも大きかったと感謝する。

今回の実践からの成果を引き続き観察すると共に、理論項目に対する課題や、理論の知識を表現力まで関連付けるためへのアプローチを探り、更なる学生に有益な指導を今後も工夫していきたい。

引用・参考文献

河原田潤 「保育士・幼稚園教諭養成系における「音楽理論」の必要性と授業展開についての一考察」常葉大学短期大学部紀要 46号 129-138 2015

平松愛子・井上紘一 「保育者養成課程在籍者の基礎的音楽理論の理解と伴奏技能及び音楽経験についての調査」近畿大学九州短期大学研究紀要 11 - 18, 2015-12, 近畿大学九州短期大学

兔束淑美 「幼児教育学科における音楽理論の授業についての一考察～アンケート調査および学生の感想を参考に～」上田女子短期大学音楽指導論集 1 3-8 2012

松川亜矢 「養成課程における学生の読譜力向上のための試みー音楽活動を通して読譜力を身につけるー」全国大学音楽教育学会研究発表（口頭発表）2017